

令和2年

秋

木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2020
Vol.
116

上松町

木曽八景の奇勝

旅人の心に刻まれる

寢覚の床

地域の歴史

中央アルプス国定公園の誕生と名勝・寢覚の床

1

地域の治水・利水

木曽駒ヶ岳の麓・上松町の砂防事業

3

歴史記録

地域と河川 第十編

5

明治改修工事による河道と輪中の変形
― 明治改修計画図に見る その三 ―

研究資料

木曽三川 巨石と巨木

土木史家 中根洋治

8



中央アルプス国定公園の誕生と 名勝・寝覚の床



中央アルプス国定公園に指定された寝覚の床 <提供：一般社団法人上松観光協会>

上松町周辺は、花崗岩地帯であり、その地形を木曽川の流れが削り、姿を現したのが寝覚の床です。

この寝覚の床は、大正十二（一九二三）年に国の名勝、その後、昭和二十八（一九五三）年には県立公園特別地域に指定されていました。さらに、今春の令和二（二〇二〇）年三月二十七日、環境省により指定された「中央アルプス国定公園」の第二種特別地域として、新たに指定がなされました。

一、中央アルプス 国定公園

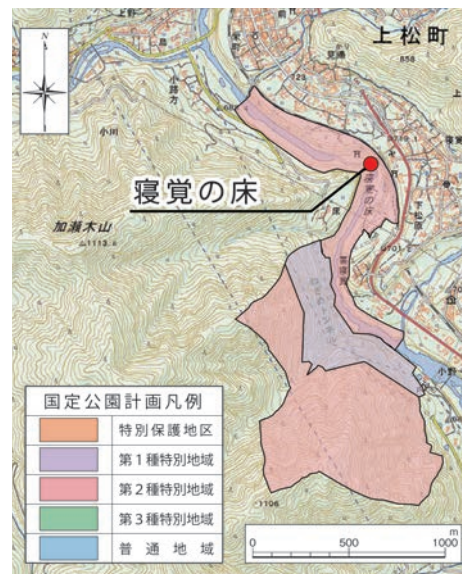
令和二（二〇二〇）年三月二十七日、環境省は長野県南部の木曽山脈のほぼ全域を中央アルプス国定公園に指定しました。中央アルプスは東に天竜川が流れる伊那谷、西に木曽川が流れる木曽谷に挟まれた東西約二十km・南北約一〇〇kmに走る木曽山脈の通称で、ほぼ全山が花崗岩で形成される非火山性連峰です。

国定公園を設定する目的には、優れた自然景観の保護、生物多様性の確保などがあげられます。中央アルプスの主峰木曽駒ヶ岳の南側には代表的な氷河地形であるカール（圏谷）、モレーン（堆積堤）、氷河湖などが存在します。この氷河地形は、約六万年前と二万年前の二回の氷期に形成され、特に千畳敷カールは宝剣岳から伊那前岳の主稜線から切れ落ちた岩盤の断崖で成り立つカール壁と、その下に広がる比較的平坦なカール底の二つの部分から成り立っているのが特徴的で、伊那谷から見る千畳敷カールは人里から壮大なカールを望める非常に珍しい景観を呈しています。

また木曽駒ヶ岳近くの濃ヶ池は、モレーンに



ヒノキ林の遊歩道
<提供：一般社団法人上松観光協会>



上松町内の中央アルプス国定公園区域
〈中央アルプス国定公園 公園計画図 13〉（環境省）（env.go.jp/press/post4018/mat04-13.pdf）を加工して作成

囲まれた窪地に形成された氷河湖で、国内で見られるのはポロシリ岳（北海道日高山脈）だけという希少な湖です。

木曽駒ヶ岳から越百山までの縦走路周辺は森林限界を超え、ハイマツ帯や風衝草原となっており、中央アルプスだけに生息する固有種のヒメウスユキソウやコケゴメグサなど貴重な高山植物が育成し、周辺の亜高山帯も含めた一帯は、レッドリストに掲載された高山蝶のクモマベニヒカゲ、ベニヒカゲ、コヒオドシなどが生息する貴重な環境が広がっています。

また、東側の伊那谷、西側の木曽谷に住む人々は、古くから林業・林産業、水田・畑作などで中央アルプスの自然の恵みを楽しみ自然と共生する暮らしを営んできました。これを踏まえ本国定公園のテーマを「アルプスの自然と山のくらし」氷期からつづく山・谷人が守る山」として、我が国を代表する典型的な氷河地形や、高山帯の貴重な生態系を将来にわたって厳正に保護し、伊那谷と木曽谷の人々の暮らしのなかで育まれた風致景観を適切に保全し、林業などの地域産業の振興を図りつつ、適正な利用の推進を目指しています。

上松町は明治以来、木曽駒ヶ岳登山の主要なルートで、幕末から明治にかけて英国の外交官

として活躍したアーネスト・サトウや、木曽川の明治改修を設計したデ・レイケも上松町から入山しています。上松町から木曽前岳を経て駒ヶ岳山頂へ至るルートは、かつてはウォルター・ウエスタンが踏破し、現在は学校登山でも利用されるメインルートです。

中央アルプス国定公園には、中央アルプス山域以外に、木曽川の景勝地「寝覚の床」が飛地で指定されています。木曽川の水流によって花崗岩が侵食されてきた渓谷地形が風致を極力保護する必要な地域と判断されたものです。また、寝覚の床の周辺もヒノキ林などの植生が分布しており、溪流景観との調和が成り立っているとして指定範囲に含まれました。

二、寝覚の床の民間伝承と芸能

寝覚の床は、急流木曽川が花崗岩の岩盤を長い年月にわたって侵食してできたもので、巨大な花崗岩の白い岩肌とエメラルドグリーンの川面の対比が美しく、国の史跡名勝天然記念物に指定されています。岩盤に見られる水平方向と垂直方向に発達した方丈節理やポットホール（罅穴）は、日本でも代表的なものです。

景勝地としての寝覚の床は古来より知られていましたが、寝覚の里（現寝覚の床）に住んでいた医者にまつわる民間伝承を基にした謡曲『寝覚』によっ

てさらに高名

となりまし

た。謡曲『寝

覚』は観世流

に伝わる室町



寝覚の床（左下）を眼下に見る臨川寺（右上）

物として能の上演の初番に置かれ、近世初頭には広く使われていた演目と考えられています。その内容は次のとおりです。

寝覚の床に長寿の仙薬を授ける老人が住んでいるという噂があり、それを聞いた時の天皇が風聞を確かめるため勅使を遣わしました。長寿の仙薬を飲んだことで三度若返り千年生きたという「三返の翁」に出会った勅使は、能楽の宴に招かれました。夜が更け二人の天女が舞い始めると翁が、自分は「医王仏（薬師如来の化身）」で世に無病息災を施すために化現したと伝え、天女とともに舞います。夜が明ける頃になると勅使に長寿の仙薬を手渡した翁は明け方の空に飛び去りました。

民間伝承としては、華宮から帰った浦島太郎が寝覚の床で釣りをして暮らしていたという話が伝わっていました。中山道が整備され、多くの公人私人が行き交うようになると、寝覚の床の奇観とともに、浦島が木曽川に釣糸を垂らすイメージが喧伝されていきました。沢庵和尚が寛永十一年（一六三四）年の『木曽路紀行』で「浦島が釣り石など云かすかさねあけたるたゞみ、在家をば見かへの里といふ」と記しています。貝原益軒は貞享二年（一六八五）年の『木曽路之記』のなかで「臨川寺という禅寺あり。其のうしろに浦島が釣りせし寝覚の床あり。」と記し、その頃には伝承が有名になっていたことがうかがえます。浦島伝説をベースにした元禄期（一六八八〜一七〇四）の創作と思われる古浄瑠璃『浦島太郎』が、海から離れた上松を舞台として書かれたのもこうした風聞を背景としているとされています。

元禄期（一六八八〜一七〇四）の頃には、浦島太郎と三返の翁が同一視されるようになりました。大淀三千風の『日本行脚文集』（元禄三年奥書）の寝覚の床の項には、「…丹後の浦島太郎左、…一睡七百年の寝覚して、再世を見かへりの翁となり…」とあります。また、臨川寺建立の由来を語る『寝覚浦嶋寺略縁起』には、

玉手箱を開けて老人となつた浦島が「見かへりの翁」と呼ばれていたことが記されています。



浦島太郎が自分の姿を映したとされる姿見の池（臨川寺境内）

明治以降も多くの文人墨客が寝覚の床を訪れ、景観や伝承について紀行文や詩歌に表しています。正岡子規は『かけはしの記』で「誠やこゝは天然の庭園にて松青く水清くいつこの工匠が削り成せる岩石は峨々として高く低く或は凹みて渦をなし或は逼りて滝をなす。いか様仙人の住処とも覚えてたふとし。」と渓谷美を描写しています。

先人たちが愛でた寝覚の床は、現在とはやや趣きを異にしています。昭和四十二（一九六七）年完成の木曽ダムなどの電源開発によって、木曽川の流量は大きく減少し、急流木曽川の印象は薄くなりました。反面、水位が下がったことで、これまで水面下にあった花崗岩の岩塊が全貌を現して、さらに色彩やかな景観を呈するようになりました。

三、上松町の眺望景観整備

木曽地域では近年樹木の繁茂などによって、美しい自然や歴史的景観の眺望が妨げられている箇所が増えています。美しい木曽路の眺望景観を守っていくため、町村、国・県の機関などが地域全体で共有できる「木曽路の眺望景観整備基本方針」（平成二十九（二〇一七）年八月三十一日策定）を定め、地域ぐるみで取り組んでいます。

上松町では、平成二十九（二〇一七）年度に寝覚の床の公共サインの更新を行いました。寝

覚の床の公共サインは、経年劣化により色あせ、木部の割れなどが発生しており、ドライバーから見づらくなっていました。そこで、新たに日本遺産のロゴマークを追加したサインに更新、観光客の利便性向上を図りました。

さらに令和二（二〇二〇）年には、長野県木曽建設事務所、JR東海と連携して、寝覚の床の景観を妨げていた支障木や散策の障害となっていた木、河川内の倒木などの撤去を行いました。この事業によって、JR中央西線の車窓から以前のように寝覚の床が見えるようになり、これに伴って寝覚の床通過時の列車内アナウンスも復活しました。



寝覚の床における眺望景観整備 左上下：整備前、右上下：整備後 提供：長野県木曽建設事務所

参考文献

- 『上松町誌 第三巻 歴史編』 平成十八年 上松町
- 『中央アルプス国定公園 指定書及び公園計画書』 令和二年 環境省
- 『中央アルプス国定公園の誕生と自然公園制度について』

令和二年 長野県環境部
鳥居フミ子

木曽駒ヶ岳の麓・ 上松町の砂防事業



平成11年6月27日、滑川中流での土石流を観測した土石流CCTVカメラでの撮影映像
〈提供：多治見砂防国道事務所〉

木曽駒ヶ岳山系は、風化の進んだ花崗岩による急峻な地形となり、上松町のほぼ中央を縦貫する木曽川には、東西から十王沢、中沢、滑川、小川などの急勾配の一級河川が流れこんでいます。

これらの河川には、崩落しやすい危険箇所が随所に見られ、上松町においては、土砂災害を防止するために国、県、町等関係機関が中心となつて各河川の危険箇所を把握し、緊急度の高い箇所から、随時整備が進められています。

一、木曽川流域第一の急流・ 滑川の砂防事業

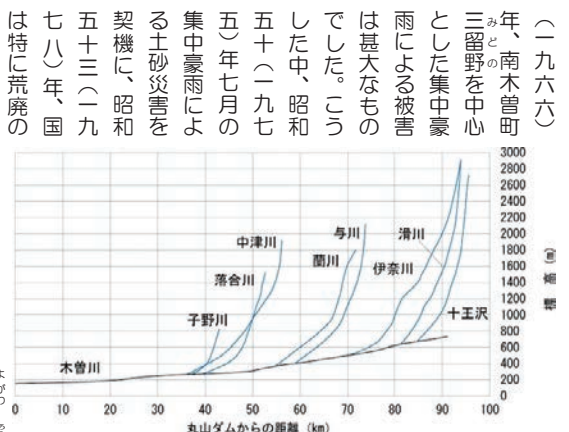
長野県木曽郡上松町は、県の南西部、木曽谷の中央部に位置し、町の東は中央アルプスの主峰木曽駒ヶ岳（標高二、九五六m）がそびえ、西には卒塔婆山（標高一、五四一m）などの山地が広がっています。町の中央を木曽川が南流して、東から滑川・十王沢が、西から小川が上松町中心部で木曽川に流入しています。住宅・田畑は木曽川沿いの河岸段丘上と支流沿いに点在しています。

こうした地形の上松町の防災上の最重要課題は、中央アルプスから急勾配を流れ下る河川の土石流でした。中央アルプスの地質は、大半が花崗岩類の岩石で形成されています。木曽川に沿って上松町から南木曽町まで連続して分布し、中津川市でも中津川中流部を中心に分布しています。これらの花崗岩地帯は風化のため崩壊地が多く、特に駒ヶ岳から南駒ヶ岳付近および恵那山付近に多く見られます。

木曽では土石流を「蛇抜け」と呼び、災害の記録は室町時代から残されています。明治三十七（一九〇四）年以降の記録をたどると、数年に一度の割合で災害が発生していることがわかります。上松町の人々は、近隣の南木曽町、大桑村の災害を見聞きしていましたが、昭和二十八（一九五三）年八月十四日、台風第七号による十王沢の土石流を体験して、その恐怖を実感しました。なかでも人々が恐れたのは、滑川で大規模な土石流がおきることでした。

滑川は、平均河床勾配が一／五・四という木曽川水系で最も急峻な河川で、その急峻さは吉野橋（上松町小川地先）から上流を見ると、眼前の河床が目より高く感じられるほどです。河床には巨礫が累々として、洪水時には岩のぶつかりあう音が聞こえるといわれています。

中央アルプスから流れる木曽川支流の災害は、昭和三十年代後半から昭和五十年代にかけては、二〜三ケ年周期で発生しており、特に、昭和四十一



木曽川上流域の河川縦断面図 〈提供：多治見砂防国道事務所〉

（一九六六）年、南木曽町三留野を中心とした集中豪雨による被害は甚大なものでした。こうした中、昭和五十（一九七五）年七月の集中豪雨による土砂災害を契機に、昭和五十三（一九七八）年、国は特に荒廃の著しい木曽川左支流の滑川、伊奈川、与川、蘭川の各流域で直轄砂防事業に着手しました。

滑川では、昭和五十三（一九七八）年に滑川第一砂防堰堤の本体工事に着手、平成元（一九八九）年に当時東洋一となる全長三〇〇m・高さ二二m・計画貯砂量三〇九、〇〇〇m³の堰堤が完成しました。

その後、平成十二（二〇〇〇）年には、第一砂防堰堤の上流に滑川第一ダム工群が建設されました。そのほか上松町域では、平成九（一九九七）年に十王沢第一砂防堰堤、平成二二（二〇〇八）年には十王沢第二砂防堰堤が完成しています。

また、平成五（一九九三）年七月、梅雨前線による豪雨で上松町内でも土石流が発生し、棧沢第一砂防ダム建設に着手、平成七（一九九五）年に完成しています。

二、滑川における砂防堰堤の 防災効果

滑川第一砂防堰堤の完成の三ヶ月後、平成元（一九八九）年七月九日、朝から翌朝までに二〇〇mmを超える集中豪雨により、滑川上流の北股沢が崩壊し土砂が流出しました。その土砂量は

約二〇〇,〇〇〇㎡と推定され、これを滑川第一砂防堰堤が捕捉しました。もし完成以前であれば、下流に甚大な災害がもたらされたと推測され、早々に事業効果が実証されました。

その十年後の平成十一（一九九九）年六月二十七日、前日の深夜から降り続いた雨は、連続雨量八十六mmを記録し、最大時間雨量二十七mmを記録した風頃に、同じ北股沢で約五〇,〇〇〇㎡の土砂が流出しましたが、滑川第一砂防堰堤により捕



令和2年6月14日、約50,000㎡の土砂を捕捉した滑川第一砂防堰堤
〈提供：多治見砂防国道事務所〉



滑川第一砂防堰堤での除石作業の様子
〈提供：多治見砂防国道事務所〉

捉され、災害にはいたりませんでした。この時の土砂の流出状況は、土石流観測施設のCCTVカメラで撮影されており、その映像は土石流解明の貴重な資料となっています。

さらに滑川では、平成十六（二〇〇四）年八月十八日に土砂流量約八〇,〇〇〇㎡、平成二十二（二〇一〇）年七月一日に土砂流量約六四,〇〇〇㎡の土砂流出が発生しましたが、いずれも砂防施設が土砂を捕捉し、被害はありませんでした。

また本年の令和二（二〇二〇）年六月十四日、須原雨量観測所（気象庁）で連続雨量八十六mmを記録する大雨によって約五〇,〇〇〇㎡の土砂が流出しました。この時、滑川第一砂防堰堤の上流で事前に除石（土砂撤去）して容量を確保していたため、土砂を捕捉することができ、下流地区での被害を未然に防止することができました。

三、現在進行する上松町の防災事業

現在上松町では国の直轄事業で、十王沢第二砂防堰堤の改築、板橋沢第一砂防堰堤の建設、滑川第一砂防堰堤の除石が進められています。

これらの事業のほか、土砂災害に対する総合的な情報収集、警報、避難システムを確立するため、雨量計の整備・土石流センサー、監視カメラ等の整備をしています。流域に設置した雨量計のデータやCCTV（監視カメラ）の画像データは、監視



十王沢第二砂防堰堤の改築
〈提供：多治見砂防国道事務所〉

システムにより市町村に情報を提供しています。上松町が策定した地域防災計画では、「風水害に強い町づくり」を目標として、治山、治水、急傾斜地崩壊対策、農地防災等の事業を総合的、計画的に推進すると、

(ア) 中小河川の整備推進と洪水ハザードマップによる住民への周知を進める。

(イ) 土石流、地すべり、崖崩れ、雪崩などを防ぐため、治山・砂防施設の設置を推進することにも、土砂災害警戒区域等の指定を通して、土砂災害の恐れのある区域について、危険の周知、警戒避難体制の整備、住宅等の新規立地の抑制を進める。

(ウ) 台風、集中豪雨等に伴う山地災害に対処する山地治山、地すべり防止施設等の整備を推進する。また、山地災害の発生を防止するため、森林の造成及び維持を図る。

こうした方針に基づき防災事業の一環として、上松町では平成三十（二〇一八）年・三十一（二〇一九）年に大沢内の支障木伐採を行う大沢河畔林整備事業（長野県森林税を活用）を実施しました。地元住民からは、見通しが良くなり治水上の安全が守られた、河川内が明るくなり河川に異常があってもすぐに分かるようになった、などの声が寄せられています。

また、ソフト対策の一環として、毎年六月の土砂災害防止月間を中心に、地域の小学生等を対象



平成31年度大沢河畔林整備事業の効果
〈提供：上松町建設水道課〉



上松出張所長による砂防の話（砂防教室）
〈提供：多治見砂防国道事務所〉

として、多治見砂防国道事務所上松出張所による砂防教室・あおぞら教室が開催され、土砂災害をはじめとした防災を学ぶ場が提供されています。山の斜面が崩れ土砂が流出することは、太古の昔から繰り返されてきた自然現象の一つです。その自然現象が生命や財産に被害を及ぼしてしまうと、土砂災害と呼ばれるようになります。自然現象を災害にしないこと、万一災害に至ってしまったとしても被害を極力小さくすることが重要です。そうした目的で長い時間をかけて砂防施設の建設・運営が行われています。

砂防施設が被害を未然に防いだことにより「起きなかった土砂災害」は、一般の人に実感が知られる機会はほとんどありません。しかし、緑深い山中で人知れず黙々と続けられている砂防事業は、確実に下流の人々の命と暮らしを守っています。

■参考文献
『砂防事業の概要』 多治見砂防国道事務所
『上松町誌 第三巻 歴史編』 平成十八年 上松町
『上松町地域防災計画』 平成三十年 上松町防災会議

地域と河川 第十編

明治改修工事による河道と輪中の変形

― 明治改修計画図に見る その3 ―



明治改修における支派川工事等位置図

明治改修工事は、木曾三川を互いに独立した河道に造り替え、網状に入り乱れていた支派川の多くを廃川としています。木曾川文庫に展示されている明治改修計画図には、現況地形図の上に赤線で計画図が記入されています。

この両方の図を注意深く見てみると、これらの工事に際して、旧堤防の一方を引堤した新河道の修築や一部の区間においては旧輪中堤防を背割堤として使用するなど、経済的で巧みな工事が行われているということがわかってきます。

本章では、明治改修工事によって大きく変化した四ヶ所を例にして、河道の拡幅と巧妙な支川改修について見てみましょう。

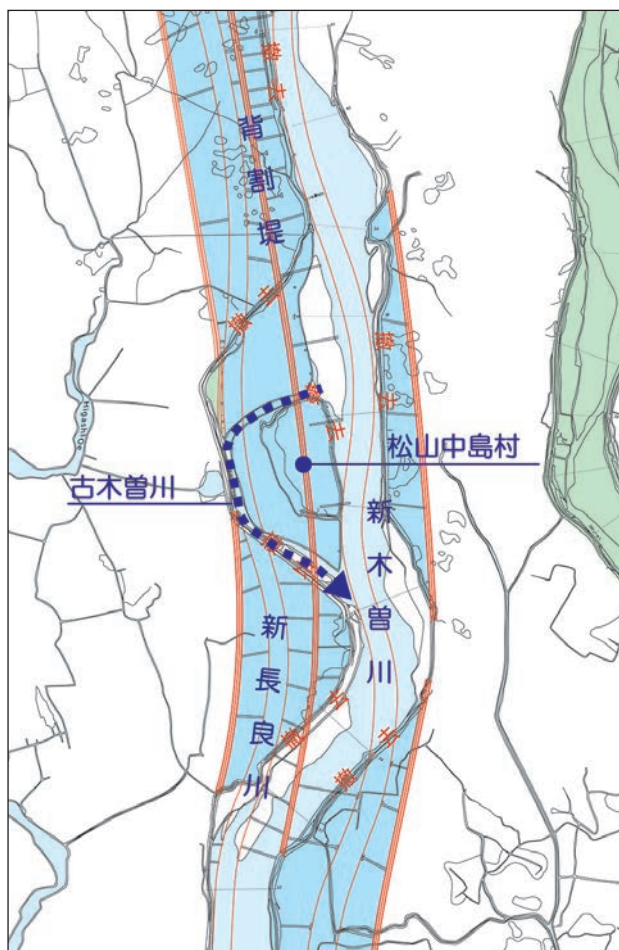
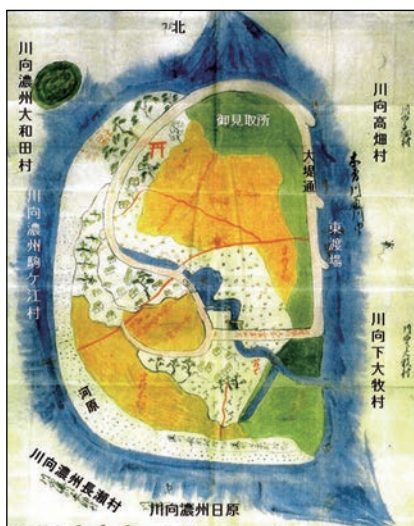


図2 明治改修計画時の松山中島村

図1 天保12年の松山中島村絵図に加筆
〈出典：八開村史資料編村絵図集〉

その後の明治改修の際には、本流・古木曾川の右岸堤を利用して堤防が計画されました。面白いことに松山中島村は、元々愛知県に属していましたが、改修で消滅する直前の明治二十（一八八七）年の県境変更によって岐阜県海西郡松山中島村として編入され、明治三十（一八九七）年には海西郡と下石津郡が合併した海津郡東江村の大字名となっています。（図2）

一 川底に沈んだ川中島 ― 松山中島村

かつて岐阜県海津郡に存在した松山中島村（木曾川長良川背割堤のノコッ付近）は、東は木曾川の主流に、西は江戸前期まで本流であった古木曾川に囲まれた集落でした。

江戸初期頃までの松山中島村は、木曾川左岸

から突き出た半島のように、現愛西市高畑町と陸続きの地でした。しかし、慶長年間（一五九六～一六一四）の洪水と正保三（一六四六）年の木曾川の掘割工事によって、木曾川本流が松山中島村と東側の高畑村との間を流れることとなり、松山中島村は川中島となりました。

その大きさは、東西が約二九〇m、南北が約七三〇mで、村の東の木曾川本流沿いは堤を築いてありましたが、西の古木曾川筋は河跡だけで堤は無く、懸廻堤とはなっていませんでした。（図1）

— 牧輪中

つに描かれています。
（図3）
ますお

(4)

右岸に移転して、牧輪中は牧村のみ

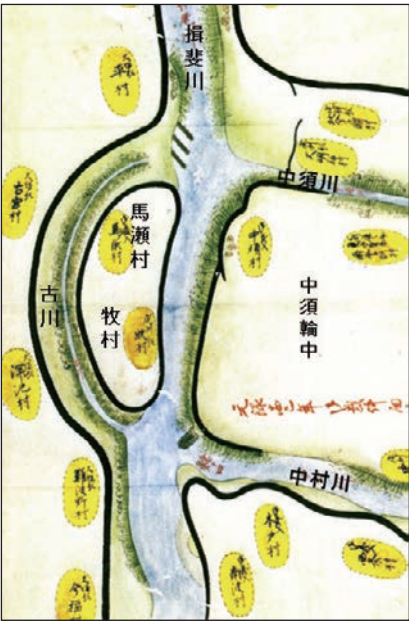


図3 明治24年の森部輪中絵図に加筆
〈出典：安八町史資料編〉

に大垣市馬瀬町となりました。

揖斐川右支川の江下げ

種類に分けられます。

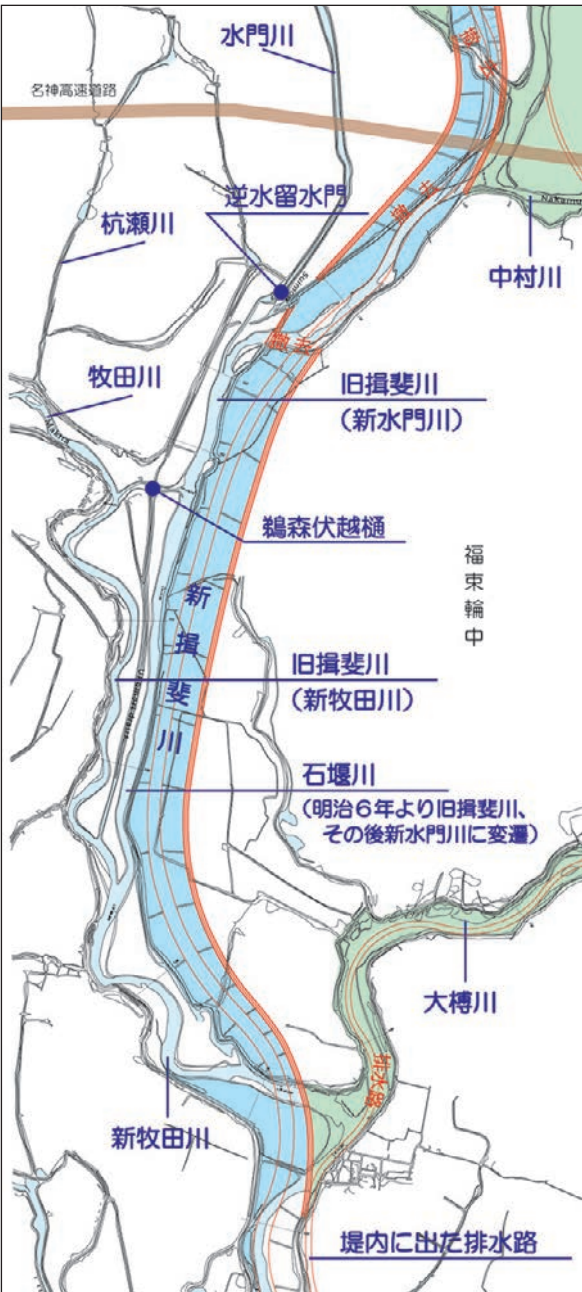


図5 水門川と牧田川の江下げ

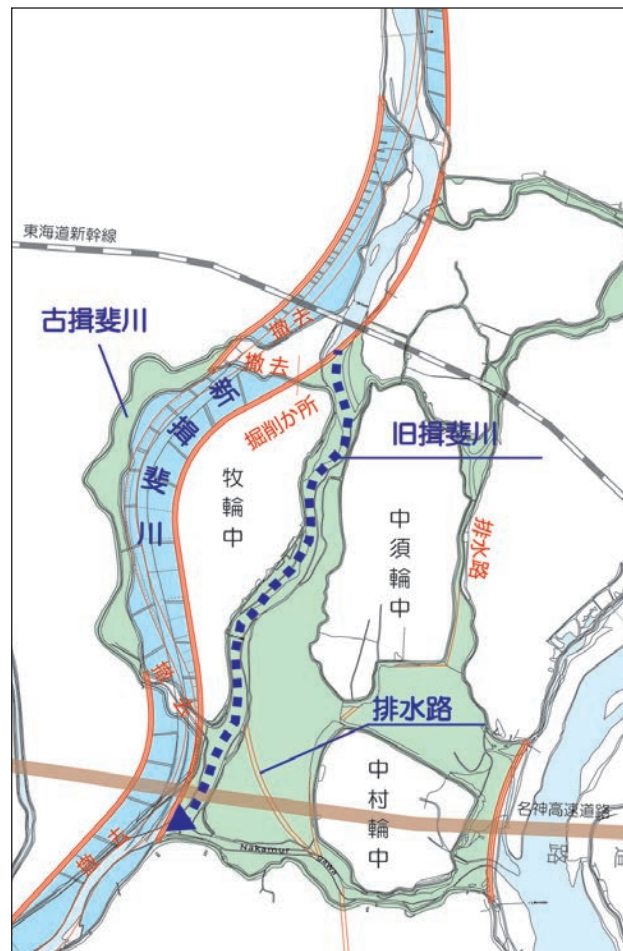


図4 明治改修計画時の牧輪中

について紹介します。

川)を開削し、揖斐川に合流させたと伝わって

います。承応二（一六五二）年、揖斐川からの洪水の遡上を止める逆水留水門が川口村（現大垣市川口）に造られ、「水門川」と呼称されるようになりました。

また明治改修工事前の揖斐川（薄い水色）は、船附村（現在の養老大橋付近）で牧田川を合流し現在の牧田川を南に流れ、今尾町で大樽川と合流していました。

つまり水門川は、逆水留水門（明治改修計画図では「Simon」と記されている）の下流約八〇〇mの福束村西側の旧揖斐川右岸に合流していました。

水門川を合流した旧揖斐川は、西流して鶴森排水路を伏越させて、船附村対岸（現養老大橋東側）で南流してきた牧田川を合流した旧揖斐川として、さらに南流していました。

一方そのすぐ東側には、旧揖斐川左岸に位置していた塩喰村（現輪之内町塩喰）の地内で掘った土取り場跡に水が流れ込み、いつしか揖斐川の支流と見なされるようになった石堰川があり、塩喰村は東の石堰川と西の旧揖斐川に囲ま

れた中州上の村でした。（図5）

石堰川は、大垣輪中南部の低湿地からの排水路として使用され、占有していた河川敷の借地代一〇〇石を大垣藩が負担していました。明治六（一八七三）年に岐阜県がこの石堰川を買い上げるなどの後、明治三十三（一九〇〇）年度より三十八（一九〇五）年度の第三期改修工事で水門川本流となりました。

つまり、水門川は石堰川の名称変更によって改修工事後は約三km下流に江下げとなり、現養老町根古地（現養老町大樽）で合流することとなりました。

（二）牧田川の名称変更と江下げ

牧田川は、前述のように現養老町船附の養老大橋付近で旧揖斐川に合流していました。改修工事で旧揖斐川が新水路へ付け替わったに伴い、牧田川と揖斐川の合流点は約六km下流に江下げとなり、牧田川には大きな治水効果を生むこととなりました。またこれに伴い、旧揖斐川は牧田川と名称変更されました。（図5）

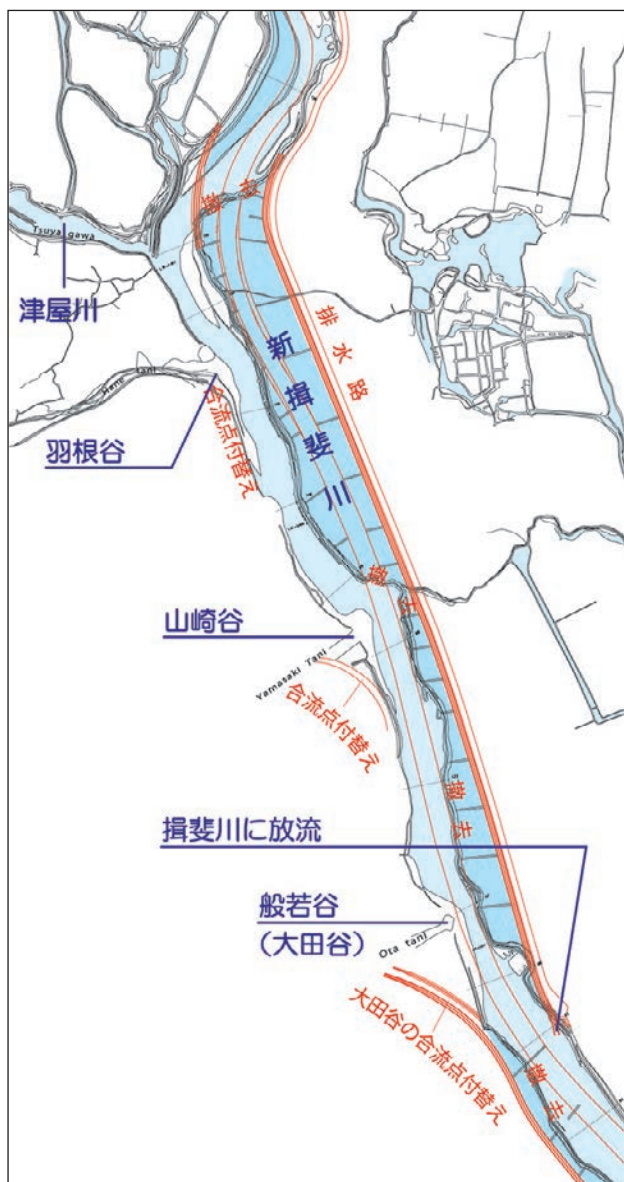


図6 津屋川の江下げ

なお牧田川と支川杭瀬川の改修は、大正十（一九二一）年に着手した大正改修（木曾川上流改修）においても、河道の拡幅や揖斐川との合流点の江下げが行われました。大正改修では、牧田川の養老町烏江地先の河道を拡幅すると共に、烏江で牧田川に合流していた杭瀬川と牧田川に背割堤を設けて分流させて、養老町船附で牧田川に合流させています。

（三）津屋川の江下げ

津屋川の源は、養老の滝で知られた滝谷です。養老山地の複合扇状地から流れ出た滝谷が、流向を南流に変えて津屋川となります。

天正十三（一五八五）年の天正地震と江戸時代の牧田川付替えまで牧田川の旧流路であった津屋川は、明治十二（一八七九）年の洪水以後、ほぼ現在の川筋を流れるようになり、明治改修以前は池辺村小坪（現養老町大樽）で揖斐川右岸に合流していました。（図6）

なお津屋川右岸堤は、旧揖斐川との合流点より1km程上流の現南濃町徳田辺りから無堤だったため、旧揖斐川からの逆水遡上による長期間の湛水被害を受けてきました。

第三期工事（明治三十三（一九〇〇）～三十八（一九〇五）年度）での新揖斐川の開削は、旧揖斐川左岸側の現海津町福岡から同安田間に約五・八kmの新揖斐川左岸堤防を築造し、高柳・福岡間の約八〇〇mを締切って行われました。

また、締切堤より下流の旧揖斐川は、新津屋川の河道とし、旧揖斐川左岸堤を新揖斐川との背割堤として、約三km下流の南濃町山崎で新揖斐川と合流させて

津屋川の江下げを実現しています。さらに、旧揖斐川右岸側に合流していた養老山地の谷からの流出土砂が合流部を閉塞させないように、各谷の合流点の付替えが図中で指示されています。

なお津屋川の改修は、支派川改修後の昭和二十六（一九五一）年度以降に行われており、揖斐川からの逆水を止め江下げの効果を補う津屋川水門は、昭和三十四（一九五九）年三月に完成しています。

四、幻となった排水路計画

明治改修事業では、新揖斐川を新川開削で実現したことにより、旧揖斐川を新支川として江下げを行い、さらに支川を合流している旧本川堤防を新たな本・支川の背割堤として巧妙に使用して河道計画が立てられていたことがわかります。

なお明治改修計画図には、新揖斐川左岸堤に沿って「Main drain」（主排水路）が書かれています。始端部は牧輪中の廃川とする東分派川（図4）の南端に描かれた排水路であり、この始端部から福束輪中を南下させ大樽川内に引入れ（図5）、今尾町で新揖斐川堤内に沿わせ南下させ（図6）、現海津町安田付近で新揖斐川に合流させる計画であったようですが、この排水路は実在していません。

■参考資料

『八開村史資料編村絵図集』

八開村役場 平成二年
『八開村史通史編』 八開村役場 平成十二年
『輪中』 安藤萬寿男 大明堂 昭和六十三年
『安八町史資料編』 安八町 昭和五十年

木曽三川 巨石と巨木

土木史家 中根洋治

縄文の時代、亡くなった人の魂は形の良い山から天に昇ると考えられ、山そのものが信仰の対象でした。

その後、山の中のおごそかな岩や巨木が信仰の対象に変化し、今でも古い神社や祠の近くにはしばしば巨石や巨木があります。

木曽三川流域に残る信仰の対象とされた巨石と巨木をご紹介します。



前半《巨石編》

ここでいう巨石とは、ただ単に大きいという岩ではなく、主に縄文時代から信仰の対象になっていたものです。

桃山公園

木曽川沿いの中津川市にあり、その風景が写真1です。古代は子孫繁栄を重視したようです。

姫栗メンヒル

恵那市笠置町の木曽川右岸の姫栗小学校跡に一本一組立っています写真2。夫婦を現すのでしょうか。周囲から縄文時代の石器が多量に発掘され、振興事務所に陳列されています。笠置山南の中腹です。鍋山メンヒル

恵那市長島鍋山にあり(写真3)、庄内川源流タ立山の北向き斜面にあるものです。もう一つの一本一組のメンヒルが、木曽川南の恵那市武並の国道四一八号の峠北側にあります(写真4上段)。

鍋山メンヒルの方は、すき間から夏至の日の出が昇るそうです。武並の方は林道工事で移転していることもあり、日の出との関係は分かりません。

メンヒルとは通常一本立ちの石柱で、縄文人の墓とされますが、恵那では二本立ちの石柱もメンヒルと呼んでいます。

武並には入り口写真1下段のような五本の立石もあります。



写真-1 中津川市の桃山公園にある夫婦岩



写真-2 姫栗メンヒル



写真-4 武並メンヒル

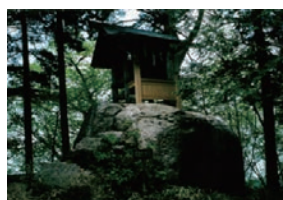


写真-5 高賀神社「奥の院」



写真-3 鍋山メンヒル

高賀神社

長良川水系板取川を上って、関市洞戸の高賀神社の裏山に「峰権児神社」があり、それは写真5のような岩です。これが高賀神社奥の院といわれます。奥の院とは旧地のことです。

高賀神社には、平安時代の仏像が地中から発掘され陳列されています。また、西暦九五〇年ごろ藤原高光が当地の鬼退治をし、その鬼の頭が関市和良の念興寺のものといわれます。

廃仏毀釈前は「高賀山蓮華寺」とされ、円空が中腹の岩屋で三年間の千日行という修行をしたそうです。

甘南美寺

山県市にあり、これは十数年前の木曽川旧河道を調べていた時、伊自良地区四日市に甘南美寺茶所という所があり、そこから調べ始めました。

カンナビという言葉は神体山のことですから甘南美寺と釜が谷山を訪ねました。そして、奥の院があるこのことで、地元の方と共に登ってみました。奥の院には写真6のような岩があり、これは磐座だと直感しました。

磐座というのは、縄文時代から仏教が伝わるま

でのご神体で、人が死んだらここから昇天すると信じられ、神社ができるまでの祭祀所でした。

なぜこの山名が神体山を表す名前ではなく「釜が谷山」になったのか、それは昭和五十一（一九七六）年の大雨で山肌が崩れているように、この山が咬み取られる「カマ」という災害地名の方が勝ったからだと思われる。

稲沢市平和町の屯倉社

この岩（写真7上段）は、群になって三十個ほど雑然とありますが、なぜこのように置かれているのか分かっていません。

この岩は白っぽい砂岩で、同じような岩が尾張地方に沢山あります。

例えば稲沢市の国府宮にある岩境（写真7下段）は五個円形に並んでいる一種の環状列石、津島神社の三ツ石、一宮市戸塚の七ツ石など全て白色の砂岩です。これらの砂岩の産地はここでしょう。

木曽三川の上流を調べてみますと、その砂岩は揖斐川にありました。古代人は揖斐川（杭瀬川）



写真-6 甘南美寺「奥の院」



写真-7 屯倉社と国府宮

から乱流を利用して墨俣へ、さらに堤防のない川で目的地へ運んだことでしょう。

筏には瓢箪や豚の内臓を空気で膨らませて浮力の補助にしたかもしれません。

三輪神社

揖斐川沿いの揖斐川町三輪地区にあり、裏山に「重ね岩」（写真8）、また「八丈岩」が山腹にあります。上面が平らになった岩で、雨乞いの夜叉ヶ池と関わる伝説を秘めています。

その上流の揖斐川の川つ淵に「はたご岩」もあり、イビというのは「神の岩のある所」という説もあります。

関市大門町の白山神社

背後には「天狗岩」があります（写真9）。神社ができる前のご神体はこいつものです。

白山神社西方の長良川は、小瀬で鵜飼が出来弥勒寺跡・川湊でも有名でした。

後半 《巨木編》

巨木とは、地上二二〇cmの幹周りが三m以上の大木を言います。



写真-8 重ね岩



写真-9 関市白山神社

「木曾義仲旗竿の櫓」

幹周り二〇四〇cm（写真10）。木曽川の上流木曽町にあります。

「与川の杉」

幹周り八八〇cm（写真11）。南木曽町の国道十九号と与川の合流点近くには、江戸末期の土石流で九十九人溺死したという地蔵があり、そこから上流へ遡った与川という集落の白山神社境内にあります。ナギソは薙ぎ（崩れ）の多い所ということです。

「上松の栃」

幹周り一〇m（写真12）。旧地名は小川村大木という所です。

持ち主に聞くと、元は三本あったが二本は素性がよかったので伐採されたそうです。この木は根元の方が細く、その寸法は八七〇cmです。

以上の三本の木は、木曽古道のルート上にあり、古い歴史を物語るかのようです。木曽古道は、中世以前の街道です。当時、木曽川沿いを通らなかった理由は、①各支流の川幅が最大の下流端を渡る危険、②木曽川沿いは崖があった、③距離が遠い、などがありました。



写真-10 義仲旗竿の櫓



写真-12 上松大木の栃



写真-11 与川の杉

上流の木曽町では、義仲旗揚げの櫓付近で木曽川を渡り、右岸を通って境峠―奈川―松本へ出たようです。

江戸時代になると、橋の技術が向上し、牛馬の通る勾配の緩い木曽川沿いが主になりました。つまり、中山道です。

「上松の桂」

幹周り五m。写真13のような桂があります。旧中山道沿いで、郵便局北側です。中部地方の他の桂は根元から枝分かれしている木が多いようです。

高山市朝日の「七本榎」

幹周り九二〇cm（写真14）。旧大野郡朝日村は、飛騨川の上流、野麦峠へ向かう所であり、意外と谷が広くゆたかりした地形にこの木はあります。

榎は桧に似た木、この木は地上からすぐ七本に分かれています。

中津川市「神坂大榎」

幹周り八八〇cm（写真15）。日本最大の榎。東山道の恵那山にある神坂峠の西側中腹にあり



写真-13 上松の桂



写真-14 七本榎

ます。中津川市の落合から舗装道路が東山道に沿って上っており、いくつかの風穴と強清水を通り越えて、標高一、三〇〇m付近の駐車場からほぼ水平な林道を西へ進みます。

湯舟沢国有林になっており、原生林の中です。桧は木の王様で、昔は火をおこす木とされたのでヒノキとなったそうです。

中津川市加子母の大杉

実測幹周り二二五〇cm(写真-16)。

中津川市加子母地区は、市の中心部から国道二五七号を付知峡方面へ入った断層谷の舞台峠付近です。

川は飛騨川支流白川の源流で、峠を越えれば飛騨川上流の下呂へ至ります。

道は鎌倉街道ともいわれ、越前から間瀬川を越え、飛騨高山や下呂からの道と合流して中津川を経て鎌倉



写真-15 神坂大桧



写真-16 加子母の大杉

を指摘しました。

この木の垂れた枝は切つてあります。入り口に「県下十勝地」の碑があり、大杉の南側にある地藏尊寺は源頼朝が建立したといわれます。近くから文覚上人の墓が見つかり西側に移動してあります。

阿寺断層は中津川市坂下から下呂市萩原まで、二万二千年前から数回の地震で出来たそうです。

現在の国道二五六号が付知川と分かれる近くの「おんぼいの湯」南には、目測の高さ十八mの断層崖があります。



写真-17 長楽寺の銀杏

記録に残る最大の地震は天正地震(天正十三(一五八六)年)になります。

中津川市長楽寺の銀杏

実測幹周り八二〇cm。雄木。所在地は中津川市阿木字大根本。県指定(写真-17)。

現地の説明版では、二五〇年前に阿木川の橋が壊れたのでこの幹を切つて橋に使ったそうです。そのつもりで眺めると根元から三mくらい上方で切られたように見えます。

武田勝信玄と勝頼軍が二度にわたつて寺に火をつけたので、この木も焦げた跡があるといわれます。

国道三六三号の南、恵那市岩村城跡から北方



写真-18 恵那市山足の榎



写真-19 白川町白山の杉

恵那市山足の榎

実測幹周り五三三〇cm(写真-18)。

この木は武並の立石を探している時に目に入りました。恵那市武並町藤山足にあり、実が成ります。

榎というのは、榎の葉に似ており、国宝室生寺の本尊はじめ仏像に使われたり、碁盤の材料として最良です。榎で作られた風呂に入るとかよい(かゆい)からこの名になったそうです。実は食料でした。写真の背面には太い枝がもぎ取られた傷があります。根元に注連縄が巻いてあり、前に国道四一八号の旧道が通っています。幹周りは地形に従い斜めの寸法です。

武並は藤と竹折が合併しました。武並は美濃遠山氏遠祖加藤景康を祀る武並神社が七箇所あったので武並となったそうです。

国道を木曾川まで下がつた、栃久保の遠藤宅にも榎があり、幹周り四八〇cmが県天然記念物になっています。栃久保棚田の下流になります。

岐阜県白川町「大山の大杉」

実測幹周り二〇m、国指定天然記念物、高さ三六m。

飛騨川の支流白川の右岸にある大山白山神社をめざします。そこへは、加茂郡白川町の国道四十一号の「美濃白川道の駅」から東のゴルフ場を通り過ぎ、さらに山道を登ります。

白山神社は、石段を数百段登ると本殿があります。付近に杉の巨木が何本もありますが、大きな本殿の東側に廻つて、奥の院の石段をさらに登るとそこに目指す巨木がありました(写真-19)。

奥の院は、標高八六二mの山頂にあり、そこから北方を見ると真っ白な御岳山がよく見えます。

「淡墨の桜」

岐阜県根尾谷にあり、実測幹周り九五〇cm(写真-20)。濃尾地震の断層近くです。

これは継体天皇が二十九才の時に植えたといわれています。継体天皇(父は滋賀県高島の鍛冶王、母は福井県三国、父の死後三国で育った

の妻は尾張の目子姫、父方の祖母は岐阜県の旧武儀郡(山

県市から七

宗町付近)

だといわれ

ます。尾張一

宮の真清田

神社から古

文書が出て

きて、継体

天皇は一宮

から根尾に

も居たそう

です。

継体天皇

は、わが国

で製鉄が始まったころの鍛冶王と思われる。当

時は湿地帯の湖沼鉄であり、葦の根元に固結する

高師小僧が主体でした。これは九〇〇度くらいの

低温で熔け、その鉄は脆いものでした。

尾張一宮真清田神社は鍛冶屋の神です。

六世紀になるとタタラが発明され、一四〇〇度

の高温を出して鉄鉱石、砂鉄を熔かし、丈夫な鉄

が生産されはじめました。

弥富市薬師寺の楠

実測幹周り八五〇cm(写真-21)

木曾川河口近くの弥富市鯛浦の薬師寺にありま

す。この付近は磯辺の城跡といわれるので、戦国

時代のころから陸地だったことでしょう。

あとがき

巨石と巨木は、沖積地にそれらがあれば、河

川は当時からそこを流れていなかった証拠にな

ります。

なお、沖積地にある屯倉社や津島神社の三ツ石

などは、運ばれたもので、神社が出来る八世紀こ

ろまでのものでしょう。



写真-20 薄墨の桜



写真-21 弥富市の楠

正島の蛙石なまのいし（上松町）

蛙石は、大むかしから、正島（現上松町正島町）の対岸で、どつしりと腰を構えて、川上をじっとにらんでいます。
この蛙石には、こんな話があります。

大蛇が竜に出世するには、山で千年と海で千年の修行をしなければなりません。

ある時、御岳山で千年の修行を終えた一匹の大蛇が、木曽川を下って海に行こうとしました。ところが、正島まで来ると、困ったことに大きな蛙石が河原で川上をにらんで立ちふさがるので、どうにも通ることができません。

しかたがないので、大蛇は竜神にお願いして、たくさん雨を降らして洪水にしてみよう、蛙石の目にふれないように濁った水のなかにもぐって、木曽川を下っていきましました。

こうして、大蛇が木曽川を下る時には、大雨が降って洪水がおきるようになったそうです。

木曽川の洪水では、蛙石が水にかくれると、

水が堤防を越えて正島の平地に浸水するといわれています。昭和の初年の洪水では、蛙石がかくれて正島一面が水没したそうです。

蛙石は、正島町から見ると木曽川を挟んだ対岸にあるので、正確には上松町小川地区にありますが、通称「正島の蛙石」と呼ばれています。



出典
『上松町誌 民俗編』 平成十二年 上松町

KISSOは、創刊号からの全てが木曽川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

『寝覚の床』〈提供：一般社団法人 上松町観光協会〉

中山道の景勝地、木曽八景のひとつで、花崗岩が木曽川の激流にもまれ浸食され、その風景は地質学分野においても標本となりうるとの評価を受けています。大きな岩が浸食されて、屏風のようにそそり立つさまは、まさに圧巻です。

編集後記

平成30年の皇太子殿下行啓を記念して、船頭平閘門に関わるコラム「船ちゃんのこぼれ話」の掲載を始めました。

船ちゃんのこぼれ話 第八話

「都市の医師となった土木技術者」

船頭平閘門の設計・施工者の青木良三郎技師は、明治25（1892）年、帝国大学工科大学（現・東京大学工学部）の2年生としてバルトン先生の衛生工学の授業を受けていました。

このバルトン先生の授業を楽しみにして、翌年入学してくることになるのが浜野弥四郎さんです。弥四郎さんは、医師である義父から、「衛生工学は、人の命を守る技術であり、その技師は『都市の医師』である。」と諭され、その道を志していました。

というのも、この頃の日本は、人の移動が活発になり都市化が進んだことを背景に、コレラの全国的な大流行が度々発生し、明治19（1886）年の死者は10万人にも及ぶ状況でした。

コレラは、汚染された水や食べ物が入ることで感染する感染症です。その予防には清潔な水が不可欠であり、そのためには近代的な水道の整備が必要と考えた日本政府に、初代の衛生工学講師・技師として招かれていたのが、バルトン先生だったからです。

明治29（1896）年、バルトン先生と弥四郎さんは、領有直後の台湾に衛生工学の技師として派遣されました。お二人は、感染症蔓延の地として恐れられていたその地で、精力的に仕事を進め、3年程で主要都市の調査、台北の上下水道の基礎計画を完成させるのですが、バルトン先生は、調査中にマラリアを発症し回復するも、体力が落ちていたこともあり悪性の肝臓腫瘍で急死されました。

弥四郎さんは、その後20年間台湾にとどまり、都市の医師として台湾全土の上下水道整備に尽力され、衛生的な台湾の基礎を築かれました。



浜野弥四郎

〈出典：台湾日日新報
明治42年10月24日〉

『KISSO』 Vol.116 令和3年1月発行

編集 木曽三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

発行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL (0594) 24-5711 ホームページ URL <https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>